

戦時下の堺の表情

昭和一六年(一九四一年)二月太平洋戦争が開始された。市民は緒戦の勝利に歓喜したが、戦局は一七年後半から一八年にかけてたちまち敗勢に転じていった。この間、一七年七月堺市は懸案の六ヶ町村合併を実現し、全国でも有数の大都市に飛躍した。また一九九年三月には待望の新市庁舎が竣工し、市の発展を象徴するかのようであった。しかし市政も市民生活も戦争完遂という至上命令のもとに完全に拘束されており、財政の大膨脹をみたにもかかわらずその余裕は乏しかった。市民にたいする統制は最大限に強化され、市民は勤労報国隊や女子挺身隊に編成され、鉱山・工場に動員されたのをはじめ、その労力・資力・余暇などの一切をあげて戦争に協力させられた。しかも、食料はほとんど全面的に配給制下におかれ、その配給すら満足になさねなくなり、衣料・燃料・日用品などの欠乏もはなはだしく、娯楽や休息の機会も奪われて、市民は非人間的な耐え生活を強要され、遂には飢餓状態にさえ陥った。教育は従ってたく軍事目的に奉仕するものとなり、児童・生徒は続々と農村・工場に動員され、果ては学校そのものが軍需工場と化されるに至った。この間、軍需生産の躍進はいちじるしく、伝統的な諸産業が没落した半面、木造船工業など軍需産業が勃興し、堺市は一大軍需工業都市に成長した。しかしその前途には空襲という破局が待ちうけていた。
 (「堺市史統編第二巻」から)

アシカ(水族館)のエサも食卓に 17年の3月に開かれた市会(当時名)は、「予算編成に当りましては市政運営の基調は、すべからず戦時国策に即応することを主眼と致し、あくまでも聖戦完遂のための統後施設の強化を建前と致し、もって市政の決戦体制確立に努むることと致したのであります(河盛安之介市長・当時)」と市政方針が述べられた。この市会での質問に、食糧難のため、水族館(明治36年~昭和36年)のアシカのエサも、市民の食卓にのぼっているのではないかと質問もされている。



水族館のアシカ島

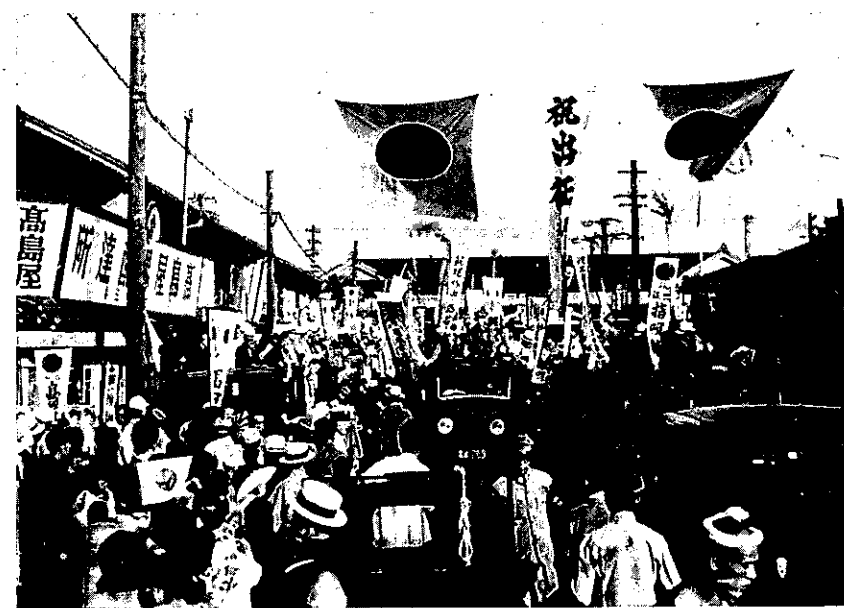


ヒトラー・ユージェントの来堺 13年10月20日、訪日派遣団が堺港に上陸。沿道の市内児童生徒、各種団体代表ら約2万人の大歓迎陣に愛きょうをふりまきつつ、仁徳陵参拝。盟邦ドイツとの交歓に市中がわきたった。

(本編掲載の写真の多くは、市保存の「写真帳」から転写したもので、当時市の委嘱等を受けて、渡辺庫治氏が撮影された。)

アシカノ前ニテアシカノ餌魚テ一皿五錢立魚ナレバ二寸角五切位ヲ賣ッテ居ルガコレナドハ飼料購入ノ財源トシテハ結構デアアルガ近頃アシカノ餌ガヨク賣レルト思ッテ居ル間ニ其ノ餌ノ魚ガ見物人ノ手ヨリ家庭ニ廻ッテ腹ノフルケテ居ル筈ノ入手難ノアシカガ餓死シテ居ルト云フ様ナコトガアリハセヌカ水族館ノ経営ハ時局柄非常ニ困難ト思ヒマスガコレニ對スル御考慮ノ餘地ガアルカドウカ
 市会会議録・昭和17年第三号から

出征兵士見送り 12年7月7日、盧溝橋事件から日中戦争が起った。緒戦の勝利に、戦争支持の気運が高められ、連日召集されて出征する兵士を盛大に見送った。



戦勝祝賀会 初期における中国戦線で日本軍が主要都市を占領するたびにひらかれ、国民精神総動員運動とならんで市民の戦意高揚にひと役買った。(南京陥落祝賀ちょうちん行列 12年12月13日 大浜公会堂前)



遺骨の帰郷 堺市出身者で戦没した人も多数にのぼった。戦没者の遺骨が堺に帰着するたびに、駅頭に祭壇を設け、在郷軍人会・町内会その他各種団体が出迎え、ほぼ隔月に一回の割合で合同市葬が行われた。

